

## 研修医・指導医リレーエッセー<sup>②③</sup>



# 患者さんに寄り添うということ

水島協同病院 1年次初期研修医 藤原 明子

水島協同病院1年次初期研修医の藤原明子と申します。岡山県出身で徳島大学を卒業しました。岡山には、実家のある県に戻りたいという思いから戻ってきましたが、様々な出会いに恵まれ、日々充実した研修生活を送っております。このような貴重な機会をいただき、大変光栄に思います。つたない文章ではございますが、温かい目でお読みいただければ幸いです。

私が医師を志したきっかけは、幼い頃から働く父の姿を見て育ったことにあります。忙しい日々の中でも患者さんや家族の話に耳を傾け、真摯に向き合う父の姿は、当時の私にとって特別なものでした。医学部に入学した当初は、漠然と「人の役に立つ仕事がしたい」という思いだけで、将来どのような医師になりたいのか明確なイメージを持っていませんでした。しかし、医師一年目となり、日々の診療や指導医の先生方の背中を追う中で、自分がどのような分野に関わり、どのような規模の病院で働きたいのか、少しずつ輪郭が見えてきたように感じています。

研修の中で特に印象に残っていることは、自身の外来で初めて診断名をつけ、その後入院となり、最期のお看取りまで関わった患者さんの存在です。それまでにも多くの患者さんを診療してきましたが、初診から終末期まで一貫して関わる経験は初めてでした。病気を告げられた時の戸惑いや不安、治療を選択する際の葛藤、そして次第に受容へと向かう過程など、患者さんの感情の揺れ動きを間近で感じました。また、現実の臨床では時間や環境の制約の中で、治療方針を迅速に決定しなければならない場面も多く、医学的判断だけでなく、患者さんの価値観や家族の思いを踏まえた意思決定の難しさを痛感しました。この経験は、私にとって「患者さんに寄り添う」とは何かを深く考えるきっかけとなりました。

研修の中で特に印象に残っていることは、自身の外来で初めて診断名をつけ、その後入院となり、最期のお看取りまで関わった患者さんの存在です。それまでにも多くの患者さんを診療してきましたが、初診から終末期まで一貫して関わる経験は初めてでした。病気を告げられた時の戸惑いや不安、治療を選択する際の葛藤、そして次第に受容へと向かう過程など、患者さんの感情の揺れ動きを間近で感じました。また、現実の臨床では時間や環境の制約の中で、治療方針を迅速に決定しなければならない場面も多く、医学的判断だけでなく、患者さんの価値観や家族の思いを踏まえた意思決定の難しさを痛感しました。この経験は、私にとって「患者さんに寄り添う」とは何かを深く考えるきっかけとなりました。

研修医としての葛藤は、誰もが抱くものだと思います。知識や経験の不足を痛感し、自分の無力さに落ち込むことも少なくありません。しかし、当院は指導医との距離が近く、相談しやすい環境が整っていることが大きな支えとなっています。日々のカンファレンスや何気ない会話の中で得られる耳学問だけでも膨大な量があり、追いつけないことに焦る一方で、その知識を少しずつ吸収していく楽しさを感じています。また、研修医や専攻医だけでなく、各科の先生方とも気軽に相談できる雰囲気があり、学びの機会に恵まれていると実感しています。

岡山県南西部は、地方都市としては人口が多く、倉敷市も広範な地域を抱えています。大規模病院が二つ存在し、中規模病院も点在していますが、それでも医療需要に対して医師数が十分とは言えないと感じる場面があります。地域医療を支えるためには、一人ひとりの医師が幅広い視野を持ち、専門性を生かしながら連携していくことが重要だと日々感じています。

将来は、内科疾患を幅広く診ることができる総合的な力を持ちながら、専門分野においても十分な知識と経験を備えた医師になりたいと考えています。そして、患者さんや家族にとって安心して相談できる存在であり続けたいと思います。研修医としての未熟さを自覚しつつも、一つ一つの経験を大切に積み重ね、地域に根ざした医療に貢献できる医師へと成長していきたいです。

まだ道半ばではありますが、支えてくださる多くの先生方や患者さんとの出会いに感謝しながら、これからも学び続けていきます。



右端が筆者。中央は医師臨床研修センター長、左端は同期の研修医